



Data 2026-9

監督: 王童 (ワン・トン)

出演: 鈕承澤 (ニウ・チェンザー) / 張世 (チャン・シー) / 曾慶瑜 (ゾン・チンユ) / 李欣 (リー・シン) / 丁也恬 (デイン・イエティエン) / 文英 (ウェン・イン) / 方龍 (ファン・ロン) / 李昆 (リー・クン)

👁️👁️ みどころ

王童 (ワン・トン) 監督の「台湾近代史三部作」たる本作を、前年の『無言の丘』(92年)に続いて「台湾巨匠傑作選 2025」で鑑賞! 「国共内戦」に伴う台湾への移住(逃亡)は王童監督の自叙伝的作品たる『赤い柿』(95年)と同じだが、兄貴分の得勝(ダーション)と弟分の門栓(メンシュアン)を主人公とする「バナナパラダイス」=台湾での人生模様は如何に?

共産スパイの容疑による拷問で精神異常をきたす得勝が衰れなら、ひょんなきっかけによる“成りすまし”人生から、妻、月香(ユエシヤン)と共に定年直前まで公務員生活を送る門栓の人生も波乱万丈だ。

張芸謀(チャン・イーモウ)監督の『活きる』(94年)が文化大革命を含む新生中国の近代史に翻弄された一夫婦の愛と絆の名作なら、本作は台湾の近代史に翻弄された2人の「外省人」の涙の人生を温かくかつユーモラスに描いた名作。148分の長尺を全く感じさせないのはもちろん、二重の“成りすまし”人生が明かされる中、偽りの父子による長距離電話での“涙のご対面”が展開するクライマックスでは、大粒の涙が流れ出るはずだ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■「台湾巨匠傑作選 2025」で王童監督の大傑作を! ■□■

日本では“台湾ニューウェーブ”として、侯孝賢(ホウ・シャオシェン)と楊徳昌(エドワード・ヤン)という二大巨匠と蔡明亮(ツァイ・ミンリヤン)が有名で、王童(ワン・トン)監督はあまり知られていなかった。そのため、「こだわりの映画館」として有名な大阪の西区にある「シネ・ヌーヴォ」において、2024年10/5から10/25まで開催された「台湾巨匠傑作選 2024」で、初めて王童監督の「台湾近代史三部作」の一つである『無言の丘』(92年)を鑑賞することができたのは嬉しかった(『シネマ 56』170頁)。私は同作

の「みどころ」で、「映画は勉強。本作を観て、それを再実感し、再確信！『バナナパラダイス』(89年)と『村と爆弾』(87年)も観なければ!」と書いた。

すると嬉しいことに、「シネ・ヌーヴォ」は次のとおり、2026年2/7から2/20まで「台湾巨匠傑作選 2025」を開催したため、私は王童監督の自叙伝ともいえる大傑作、『赤い柿』(95年)と合わせて、「台湾近代史三部作」の一つである『バナナパラダイス』(89年)を鑑賞することができた。

上映スケジュール

(各回完全入替制)

2/7 土	10:30 狼が羊に恋 をするとき (シネ・ヌーヴォX)	14:05 赤い柿	17:15 村と爆弾	19:15 バナナパラダイス
2/8 日		15:15 赤い柿	18:25 無言の丘	—
2/9 月		14:25 赤い柿	17:35 バナナパラダイス	20:25 村と爆弾
2/10 火		16:15 赤い柿	19:20 無言の丘	—
2/11 水		10:00 村と爆弾	12:00 赤い柿	15:10 バナナパラダイス
2/12 木	15:05 狼が羊に恋 をするとき (シネ・ヌーヴォX)	10:00 赤い柿	13:10 無言の丘	—
2/13 金		10:00 童年往事	12:40 赤い柿	—
2/14 土		20:40 台北ストーリー		
2/15 日		20:40 恋恋風塵		
2/16 月		—		
2/17 火		20:40 風が踊る		
2/18 水		18:10 赤い柿		
2/19 木		17:50 赤い柿		
2/20 金	17:55 赤い柿			

パンフレットやネット資料によると同作のストーリーは次のとおりだ。

1949年、幼馴染みのダーションを頼って国共内戦中の国民党軍に潜り込んだ青年メンシュアンは、寒風吹きすさぶ荒涼たる中国華北から、バナナが実る緑豊かな南国台湾へとたどり着く。その新天地で二人にスパイ容疑がかけられ、メンシュアンは命からがら逃げだす。途中、ある男の臨終に出くわしたメンシュアンは、その妻ユエシャンに彼女の夫に成りすまして仕事に就くことを持ちかけられる…。大陸から台湾に渡り、数奇な運命を辿る男の半生を綴る。日本人の知らない戦後台湾史を、ユーモアあふれるエピソードと奇想天外な展開で描き出す最高傑作!

たしかに148分という長尺になった本作のストーリーを要約すれば上記のとおりだが、これだけでは本作の素晴らしさは伝わらない。そこで、いくつかの私の視点から本作の素晴らしさを紹介したい。

■ 2人の兵士はなぜ華北エリアの戦地から台湾へ? ■

日本は1945年8月15日に終戦(敗戦)を迎えたが、侵略者を追っ払った中国大陸では、その後も「国共内戦」が続いたことは周知のとおりだ。本作の主人公は、そんな国共内戦に国民党の兵士として従事している男・得勝(ダーション)(張世/チャン・シー)と、幼馴染のダーションを頼って国民党に潜り込んだ青年・門栓(メンシュアン)(鈕承澤/ニウ・チェンザー)の2人だ。

中国大陸は広い。したがって、私が2009年11月に旅行した福建省のアモイ(廈門)が南国の情緒たっぷりだったのに対し、日本が「満州国」として支配した華北エリアは寒い。遼寧省の大連や瀋陽はそれほどでもないが、吉林省の長春や黒龍江省のハルビンの寒さはものすごいものだ。したがって、そんな華北エリアで共産党軍と戦っていた、国民党軍の

得勝や門栓にとって、バナナという美味しい果物がどっさりある暖かい島、台湾は夢のような所だったらいい。

本作と同じ日に観た、王童監督の『赤い柿』(95年)の導入部も本作と同じように、国民党の王仲廉將軍一家が1949年に上海から台湾に乗船する(逃げていく)姿から始まったが、同作では王一家が悲壮な覚悟で移っていくのに対し、本作では共産党のスパイだという容疑をかけられた2人が、半分台湾(のバナナ)に憧れて(?)、大陸の華北地方から台湾(島)に逃げていく導入部のストーリーは、どこか喜劇的かつ楽観的だ。本作導入部のそんな雰囲気は日本の山田洋次監督の作風そっくりだが、これはきっと王童監督が尊敬している小津安二郎監督の雰囲気を真似たものだろう。

それはともかく、本作導入部では、門栓が慰問団の一員として劇団の女優(丁他恬/ディン・イエティエン)を世話するユーモラスな姿(?)や、それとは一変して、実在の人物の名を借りた柳金元(リウ・ジンユエン)という偽名が原因となって「共産党のスパイだ」と疑われた得勝が激しく拷問を受ける姿が、次々とスクリーン上に登場してくるので、それにも注目！この激しい拷問によってどうやら得勝は精神異常をきたしてしまったようだが、そこら辺りも、どこまでがスパイ容疑を跳ねつけるための“お芝居”なのかがよくわからない微妙な演出になっているからすごい。他方、台湾に逃げていく途中で門栓はそんな得勝とはぐれてしまったが、それまで何ゴトも兄貴分の得勝に頼って生きてきた門栓は、これから台湾で一人でどうやって生きていくの？

■□■見えすいた“成りすまし”でも、混乱期の台湾なら！■□■

最近、大阪では司法書士が関与したとみられる「地面師」の不動産売却をめぐる大事件が話題を呼んでいるが、本作中盤では、門栓が偶然、夫と赤ん坊連れの人、月香(ユエシヤン)(曾慶瑜/ゾン・チンユ)と知り合い、病気だった夫の李騏驎(リー・チーリン)が死亡してしまったため、門栓が李騏驎に成りすまし、妻の月香と共に赤ん坊を連れて夫婦として、「ある就職先」に向かうストーリーが登場するので、その面白さに注目！

「国共内戦」で国民党に勝利した共産党は1949年10/1に「新生中国」の建国を宣言し、毛沢東主席の指導下、ひたすら社会主義国家への道を歩んだ。それに対して、1945年8/15まで日本の統治下にあった台湾は、それまでの日本人 VS 原住民の対立に加えて、大陸から新たにやってきた外省人と、もともと台湾に居住していた内省人との対立が加わり、大きな混乱が発生した。また、日本が1951年にサンフランシスコ講和条約の締結によって独立国家になると共に、日米安保条約を締結してアメリカへの基地提供と引き換えに米軍による日本の安全保障を求める体制が確立すると、台湾にも次第に米軍やアメリカ人が増えてくることに。

そんな日本敗戦後の国際情勢(アジア情勢、台湾情勢)を理解すれば、赤ん坊を連れてまま李騏驎に成りすました門栓と月香の夫婦が、本来、李騏驎の就職先とされていた米軍施設で門栓が働くようになる本作中盤のストーリーも理解できるはずだ。もっとも、そこ

での仕事は高学歴のエリートだった月香の亡夫、李騏驎に紹介されたものだったから、本来英語など全く読めない門栓には土台無理な仕事。ところが、そんな頼りない門栓に代わって、何事も前向きでたくましくかつ要領のよい月香が何とかごまかし、ごまかしながら仕事を処理していたからすごい。また、門栓の方も月香のハッパを受けて英語の勉強を始めた上、その後はさらに公務員の試験を受けて見事合格してしまうからこれもすごい。

侯孝賢監督の『非情城市』（89年）（『シネマ 17』350頁）は、戦後の戒厳令を含む台湾の（暗い）歴史を厳しく直視した歴史的名作だが、本作はそれとは全く別の視点から門栓と月香の“成りすまし人生”をユーモラスに描きながら、戦後の台湾の歴史を描いたものだから、そのすばらしさに注目！

■□■得勝の精神異常ぶりにも注目！こりゃ哀れ！■□■

本作導入部における得勝と門栓の関係は、出来の悪い弟分の門栓に対して、何事も強く、たくましく、兄貴分の得勝がリードするという関係だ。しかし、中国大陸の華北エリアから台湾に脱出してくる過程で、得勝が共産スパイの疑いをかけられた上、厳しい拷問を受けたのはかわいそう。それによって得勝は精神異常をきたしてしまっただけから、さらにかわいそうだ。

本作中盤は門栓が李騏驎に成りすまし、子連れの妻、月香と共に暮らすストーリーが面白いが、それに続いてバナナ農園で“大将”のあだ名で暮らしている得勝と門栓・月香夫婦が再会するストーリーと、そこに見る得勝の変貌ぶりも興味深い。バナナは今でこそ安くどこにでも売っている果物だが、私の小学生時代は、病気で寝込んだ時だけお見舞いにもらったバナナを1本食えることができるほどの貴重な果物だった。しかし、得勝がバナナ農園のおばさん（文英／ウェン・イン）とバナナ農園のおじさん（方龍／ファン・ロン）らと共に働いているバナナ農園の姿を見ると、何百本もあるバナナの木から膨大な量のバナナが収穫されている姿にビックリ！なるほど、これだから台湾はバナナパラダイス！

それはともかく、本作前半に見る、強くたくましい得勝と本作中盤のバナナ農園に見る精神異常をきたした得勝の姿をしっかりと対比し、あの時代（国共内戦）の歴史に翻弄された得勝の悲劇をしっかりと確認したい。

■□■時を経て、定年を控えた門栓に大事件が勃発！■□■

鞏俐（コン・リー）と葛優（グォ・ヨウ）が共演した。張芸謀（チャン・イーモウ）監督の『活きる』（94年）は、新生中国の建設に伴う壮大な歴史と、それに翻弄された1組の夫婦の愛情と絆をテーマにした名作中の名作だった（『シネマ 2』25頁、『シネマ 5』111頁）。それと同じように、本作も外省人の受け入れを中心とする戦後台湾の壮大な歴史と、それに翻弄された得勝と門栓を中心とする人物たちの悲喜こもごもの人生を描いた素晴らしい作品だ。

そんな本作は、得勝と門栓の華北エリアから台湾への脱出行から始まるが、そのラストには、李騏驎に成りすました上、公務員試験にも合格し、長期に渡る公務員生活を勤め上

げ、今や定年を間近に控えている老・門栓（李昆／リー・クン）が登場するからビックリ！もちろん、あの月香も白髪混じりになっているが、さらに驚くべきは、月香の腕の中でおしめを取り替えられていた赤ん坊が今や成人し、結婚式を迎えるまでに時が経っていることだ。

台湾への脱出は一時的なもので、近い将来きっと大陸に戻るはず。若き日の得勝も門栓も当然そう考えていたが、長い時を経た今、それは無理な話。門栓の父親は今どうしているの？それに対し、月香が連れていた赤ん坊は門栓の子供ではなく李騏驎の子供だから、その子が成長した今、亡き父親、李騏驎に代わって李騏驎の父親を探すことは可能だ。

しかして、今香港に新婚旅行に旅立った李騏驎と月香の息子は、何と今李騏驎の父親を探し出し、今夜台湾に電話してくると伝えてきたから、さあ大変！もちろん、今は結婚するまでになったあの赤ん坊は自分の父親が李騏驎だと信じているわけだが、李騏驎の成りすましに過ぎない門栓は、李騏驎の実の父親と電話がつながれば一体どんな話をすればいいの？そんなユーモアたっぷりの設定はいかにも山田洋次的だが、本作に見るその素晴らしいストーリー展開はあなた自身の目でしっかりと！

■□■さらにビックリ！何と月香も成りすまし！■□■

香港への新婚旅行に旅立った李騏驎の息子の努力によって、李騏驎の父親を探し出したので、今夜 8 時に台湾に電話がかかってくると聞いた門栓はビックリ！そこで門栓がそんな電話対応は俺には無理だからと妻の月香に託そうとしたのは当然だ。そして、それまでの月香なら常に門栓をフォローしてきたわけだが、なぜか今回の月香は断固それを拒否！それは一体なぜ？

この夫婦の力関係は断然月香の方が上ではなかったの？そう思いながら 2 人の“掛け合い”を見てみると、そこで月香は何と「私も成りすましだ」と告白したからビックリ！それはつまり、ある時男たちに襲われた月香を助けてくれた男性が李騏驎だったということだ。ところが、そんな李騏驎の妻が赤ん坊を残したまま亡くなったため、月香が李騏驎の妻になりすまし、「必ずこの赤ん坊を育ててみせる」と決意して新たな人生をスタートさせていたわけだ。そんな告白を今になって初めて聞かされた老・門栓は当然口アングリ！

そんなドタバタ劇（？）が展開される中で、香港からの電話が台湾の老・門栓の家につながったが、そこで老・門栓が見せる一世一代の名演技に注目！それは決して芝居ではないもの！つまり、そこで老・門栓が見せる涙と叫びは、今、電話口にいる李騏驎の父親を、大陸に残してきたまま会うことができない自分の本当の父親だと思えたためのものだ。そのため、門栓は涙ながらに大声で自分の親不幸を詫びたが、その思いは本物の息子、李騏驎であろうが、成りすましの息子、門栓であろうが同じものになっているはずだ。

2026（令和 8）年 2 月 16 日記



Data 2024-69

監督: 王童 (ワン・トン)

出演: 澎恰恰 (ボン・チャチャ) /
黄品源 (ホアン・ピンユエン)
/ 楊貴媚 (ヤン・クイメイ)
/ 陳仙梅 (チェン・シェンメイ)
/ 文英 (ウェン・イン)
/ 任長彬 (レン・チャンピン)
/ 陳博正 (チェン・ボーショ)
ン) / 張龍 (チャン・ロン)
/ 矮仔塗 (アイ・ザイトウ)
/ 篠崎功 / 陸筱琳 (ルー・シヤオリン / ルー・イーチン)

👁️👁️ みどころ

あなたは、王童 (ワン・トン) 監督を知ってる? 彼の“台湾近代史三部作”を知ってる? 私は、侯孝賢 (ホウ・シャオシェン)、楊徳昌 (エドワード・ヤン) という台湾の二大巨匠と蔡明亮 (ツァイ・ミンリャン) はよく知っているが、寡聞にして王童監督も「台湾近代史三部作」も知らなかった。したがって、シネ・ヌーヴォで開催された「君はワン・トンを観たか! 台湾巨匠傑作選 2024」は必見だ。

1927 年前後の日本統治下の台湾東北部では、ゴールドラッシュがあったらしい。『セディック・パレ』(11 年) で見た『霧社事件』(1930 年) の少し前に、今や日本人にも観光名所として有名な九份の売春宿を舞台として、こんな悲しい物語があったとは!

映画は勉強。本作を観て、それを再実感し、再確信! 『バナナパラダイス』(89 年) と『村と爆弾』(87 年) も観なければ!

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■「君は王童を観たか! 台湾巨匠傑作選 2024」を開催! ■□■

大阪の西区にある「シネ・ヌーヴォ」は、十三の「第七藝術劇場」と並ぶ、大阪名物のこだわりの映画館。同館で「君はワン・トンを観たか! 台湾巨匠傑作選 2024」が開催され、侯孝賢、楊徳昌の映画全 12 作品が連続上映されていることを知ってビックリ。

「台湾の巨匠」として私は、①侯孝賢、②楊徳昌、③蔡明亮の 3 人はよく知っている。また、『ラブゴーゴー』(97 年) (『シネマ 47』264 頁、『シネマ 54』418 頁) と『熱帯魚』(95 年) (『シネマ 47』259 頁、『シネマ 54』413 頁) は鑑賞し、評論も書いているし、『恋愛風塵』(87 年) (『シネマ 38』233 頁、『シネマ 44』203 頁) も同じだ。しかし、王童監督も知らなかったし、今回の企画の目玉になっている、王童監督の「台湾近代史三部作」

たる①『村と爆弾』(87年)、②『無言の丘』(92年)、③『バナナパラダイス』(89年)も全く知らなかった。「台湾巨匠傑作選 2024」の上映スケジュールは次の通りだから、これは必見!

台湾巨匠傑作選 2024			
10/5(土)	10:00 無言の丘	—	—
6(日)	10:00 村と爆弾	12:00 狼が羊に恋をするとき	
7(月)	10:20 バナナパラダイス	13:15 村と爆弾	
8(火)	9:50 狼が羊に恋をするとき	11:35 熱帯魚	2024. ———— 10.5 [土] ↓ 10.25 [金]
9(水)	10:00 無言の丘	—	
10(木)	10:00 熱帯魚	12:05 狼が羊に恋をするとき	
11(金)	11:00 バナナパラダイス	—	
12(土)	10:15 狼が羊に恋をするとき	12:00 村と爆弾	10.25 [金]
13(日)	10:40 無言の丘	—	
14(月・祝)	10:20 バナナパラダイス	—	
15(火)	10:00 ラブゴーゴー	12:15 狼が羊に恋をするとき	
16(水)	9:50 村と爆弾	11:50 ラブゴーゴー	
17(木)	10:10 狼が羊に恋をするとき	12:00 村と爆弾	
18(金)	10:00 無言の丘	—	
19(土)	13:55 少年	15:50 台北ストーリー	
20(日)	13:25 狼が羊に恋をするとき	15:10 青春神話	17:15 愛情萬歳
21(月)	14:15 ラブゴーゴー	16:30 熱帯魚	18:40 無言の丘
22(火)	14:20 恋恋風塵	16:40 無言の丘	19:55 村と爆弾
23(水)	14:00 無言の丘	17:15 少年	19:10 台北ストーリー
24(木)	13:15 台北ストーリー	15:35 恋恋風塵	17:55 少年
25(金)	15:00 河	17:15 愛情萬歳	19:35 青春神話

■□■ワン・トン監督は 1942 年安徽省生まれ! 今なお健在! ■□■

今回の企画については、「台湾巨匠傑作選 2024」と題する立派な定価 1,000 円のパンフレットが作られ、ワン・トン監督の「台湾近代史三部作」の紹介や、台湾ニューシネマの監督たちの数多くの作品紹介がされているから、これは必読!そこに収録されている「台湾日本統治時代年表」(次頁に掲載)も台湾の近代史を学ぶ上で貴重な資料だ。

1945年8月15日の日本降伏後の、台湾における内省人と外省人との対立については、ホウ・シャオシェン監督の『非情城市』(89年)、『シネマ 17』350頁)が有名だが、日清戦争(1894~95年)の勝利と下関条約によって、清から台湾の割譲後の日本統治時代の台湾の近代史についてはあまり知られていない。私が知っているのは、『セデック・バレ』(11年)で描かれた「霧社事件」や、『KANO 1931 海の向こうの甲子園』(14年)、『シネマ 35』290頁、『シネマ 44』211頁)で描かれた第17回全国中等学校優勝野球大会で嘉義農林学校(KANO)が準優勝した物語くらいだ。

1942年に安徽省で生まれたワン・トン監督は、キン・フー(胡金銓)監督の『残酷ドラゴン 決斗竜門の宿』(67年)、『シネマ 44』180頁)や『侠女』(70年)、『シネマ 44』182

頁)に美術スタッフとして参加していたそうだから、両作とも鑑賞したことのある私としては、がぜんワン・トン監督に親密感を抱くことに。また、「台湾近代史三部作」は自身の監督作品だが、『熱帯魚』(95年)と『藍色夏恋』(02年)、『シネマ3』82頁)が、彼のプロデュース作品であることを知ると、さらに親密感が。そして、第3にワン・トン監督が中国本土の安徽省生まれと聞くと、安徽省出身者との親交が多い私は、さらに親密感を抱くことに。

そんなワン・トン監督は、80歳を超えた現在も、魏徳聖(ウェイ・ダージョン)監督が製作中の『台湾三部曲』にアドバイザーとして関わっているそうだからすごい。

■□■本作の時代設定は？舞台は？主人公は？■□■

「台湾近代史三部作」のラストとなる『無言の丘』は1992年に制作されたが、その時代設定は日本統治下の大正末期、つまり1927年前後。舞台は日本統治下の台湾東北部だ。今では台湾は日本人にとって大人気の観光名所だが、その中でも台北の九份は、宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』(01年)の影響もあり、超人気スポットだ。私も二度訪れたことがあるが、狭くて急な階段を登りながら、所狭しと並んだお店を見て歩くのはめっちゃ楽しかった。そんな台北の1927年前後、金瓜石では、ゴールドラッシュが生まれ、日本人の厳格な管理のもとに金の採掘が行われていたらしい。

本作冒頭、阿助(チュウ)(滄恰恰)と阿厝(ウエイ)(黄品源)の小作人兄弟は、両親の葬儀費用のために地主と不当な長期労働契約を結ばされていたが、ある日これを一方的に破棄して村を逃げ出し、金瓜石に向かうことに。そして未亡人のズー(楊貴媚)の家に間借りしながら、劣悪な環境の下、日本人が管理する鉱山で金採取に従事することに……。

■□■ワン・トンを彩る3人の女優ともう1人の女優に注目！■□■

「台湾巨匠傑作選2024」と題するパンフレットには、「ワン・トン映画を彩る3人の女



優」として、①楊貴媚（ヤン・クイメイ）、②文英（ウェン・イン）、③陸弈靜（ルー・イーチン）が紹介されている。この3人は、本作のストーリー展開においてそれぞれ重要な役割を果たすので、それに注目！とりわけ、未亡人ズー役を演じた楊貴媚（ヤン・クイメイ）は、2人の亭主と死に別れた後、3人の子供を育てながら、男を自宅に招いて売春業を堂々と営んでいたから、当初は「嫌な女」だと思っていたが、後半からクライマックスにかけては、イヤイヤこれはなかなかいい女！そのド迫力に感服しながら、その美貌にも……。

また、九份の女郎屋のしっかり者“女将”媽媽桑（ママさん）役を演じた文英（ウェン・イン）も、病魔に侵された娼婦役を演じた陸弈靜（ルー・イーチン）も、それなりの存在感を見せるが、私が注目したのは、娼館で下働きをする日本人娘（琉球生まれ）の富美子を演じた女優・陳仙梅（チェン・シェンメイ）だ。

富美子は阿助（チュウ）と阿脛（ウェイ）が金瓜石に到着した時に初めて出会った娘だが、そのワンシーンだけで富美子の存在感は際立っている。娼館では、赤目（任長彬）という日本人の少年も、媽媽桑（ママさん）の支配下で下働きをしていたが、この二人は支配—非支配の関係では、一体どんな立場に？

日本人統治下の台湾で、「国語運動」、「改姓名」、「志願兵制度」、「宗教・社会風俗改革」を中心とする、いわゆる「皇民化政策」が進められたのは1937年以降だが、1927年前後の日本管理下に置かれた金の鉱山たる金瓜石での、支配と非支配の関係は如何に？パンフレットにある本作品の紹介では、「物語中、日本人と台湾人、地主と小作農、管理売春者と娼婦、買う者（男）と買われる者（女）という支配者—非支配者の立場を入れ変えながら幾重にも複雑に絡み合う。」と書かれているが、まさにその点が本作のポイントだ。

そんな本作では、売春宿の下働きとして働く日本人の美少女（？）富美子と日本人の若者、赤目の存在に注目！

■□■兄弟の恋模様は？鉱山の管理は？■□■

地主との契約を一方的に破棄して村を逃げ出した阿助（チュウ）と阿脛（ウェイ）は、今、未亡人ズーの家に下宿しながら鉱山で働いていたが、ここで真面目に働いたらお金が貯まり、土地を買う資金やいい女と結婚する夢が実現するの？客観的にはとてもそうは思えないが、それでも二人の兄弟は毎日懸命に働いていた。本作は、今ドキの日本で大流行りの青春純愛劇ではなく、身分的にも経済的にも苦しい時代状況下の物語だから、阿助（チュウ）と阿脛（ウェイ）にはおおよそ恋愛などありえない。せいぜいできることは、お金を貯めて、媽媽桑（ママさん）が経営している売春宿に行くことくらいだ。もっとも、意外に“その方面”に興味を示さない阿助（チュウ）は女嫌い？いやいや、本作中盤のストーリーを見てみると、どうやらそうでもなく、阿助（チュウ）はズーに気があるらしい。他方、弟の阿脛（ウェイ）の方も、最初に富美子を見た時から彼女が気になっているらしく、仲間たちとともに娼館に行っても、富美子が無理だと分かると一人でずすと娼館を後にしていたからアレ、アレ……。

他方、台湾人労働者をこき使って鉱山での金採掘を行っている支配者たる日本人にとっては、鉱山の管理が大変。勝手に金を持ち出されては大変だから、鉱山で金を採掘している労働者を厳格に管理しなければならない。しかし、「上に政策あれば下に対策あり」の中国（台湾）だから、阿助（チュウ）と阿脛（ウェイ）たちの金鉱山で働く労働者たちは、発見した金を体の“ある部分”に隠して持ち出していたからすごい。その持ち出し（盗み）の実態は、あなた自身の目でしっかりと。また娼館の女将・媽媽桑（ママさん）は、労働者たちが持ち出した金を安く現金に変えていたから、こちらもしたたかだ。こんな姿を見ていると、たしかに1927年前後の日本統治下の台湾東北部の金瓜石や九份における支配-非支配の関係は顕著だが、そこで営まれる人間模様や男女の恋模様は、やはり人間らしいものだ。

激しく咳き込む娼婦をお相手にするのは、私だって阿脛（ウェイ）と同様、願い下げだが、それでも阿脛（ウェイ）は「あなたの身体を見られたからそれで十分だ」と言って料金を支払っていたから偉い。また阿助（チュウ）も地主からの追っ手に捕まろうとした際、スパッと左手の指二本を切り取り、「これで勘弁してくれ」と率直に謝罪していたから、これも偉い。

私はそんな兄弟をはじめ、赤目も富美子も、そして今日も亭主の写真と子供たちの前で、客をとりながらたくましく売春業を営んでいるズーたちの幸せを願ったが……。

■□■タイトルの意味は？脚本家・呉念真の狙いは？■□■

本作の監督はワン・トンだが、脚本を書いたのは台湾ニューシネマを代表する映画人の一人である呉念真（ウー・ニエンチェン）だ。ワン・トン監督は、「台湾近代史三部作」制作当初、『梅與櫻（梅と桜）』のタイトルで、日本人娼婦と台湾人工夫との恋愛物語を製作するつもりだったらしい。ところが、呉念真が九份の近く、現在では猫村として有名な旧炭鉱町・猴硐（ホウトン）で生まれ育った経験と、一帯に伝わる「無縁の墓」の物語を盛り込み、脚本を仕上げたようだ。本作の原題が『無言的山丘』、邦題が『無言の丘』とされているのは、そのためだ。

私は2001年8月に西安旅行に行き、兵馬俑や華青池を観光したが、始皇帝陵は観光できなかった。台湾は小さな島だから、中国大陸の広さとは比べ物にならないし、呉念真が脚本を完成させるについてこだわった、猴硐（ホウトン）にある「無縁の墓」も西安の始皇帝陵の広大さとは比較にならないのは当然だ。しかして、あなたは本作ラストに見る「無言の丘」をどう考える？

ちなみに、デジタルリマスターされる前のオリジナルバージョンでは、最後にモノログで富美子の死が伝えられるが、デジタルリマスター版ではそれがカットされているようだ。日本人の私には台湾人俳優が演じている富美子や赤目の日本語には違和感があるが、それを差し引いても、ワン・トン監督の力量の素晴らしさに感服！

2024（令和6）年10月7日記